

をなす水巻町大字伊佐屋或は立屋敷其他の出土品が個々に取り上げられたに過ぎない。こゝに於て杉原莊介氏及び東京考古學會の同人はこの缺を補ふべく、昭和十五年八月十一日より約一週間、立屋敷遺跡に就いての發掘調査を行ふたのであつて、本書はその結果の報告である。A四判、本文五〇頁、圖版三六葉より成るこの書は、先づ遺跡の狀況、遺物の解説、分類なる一般報告書の型に依る記述の他に、別に第五章に文化なる項目を設け、立屋敷出土の遺物群、殊に土器のもつ型式、形態、様相を概観した上、第六章を結語として、此等第五章以下を考察編となし、それらに三分の一以上を費す所に一つの特色があり、この點からすると、寧ろ論説たるの趣を示してゐる。この報告書としてやゝ異様な體裁は、蓋し發掘に依つて並・質共に目星しきものを見出さなかつた事と、著者がこの機會に彌生式土器文化觀を闡陳せんとする意圖の見られる事であらう。著者の意見を要約すると發見の彌生式土器に三型式の存する事、その初期の立屋敷層で標識される古式のものから、伊佐屋層をへて末期水巻町層に到るまで、夫々區別の存する事、それらは層序の上からも明かで、一方この經過の間には時の斷絶が考へられるのである。即ちこの層序的の隔間はそれ等三つの遺跡層より復元される聚落が直接に繼承されたものでないことを示し、その間に時間的空隙を認めざるを得ず、延いて三つの聚落は夫々自身の文化期に於いて、一應の終末を遂げてゐることゝなるやといふのである。たゞ遺跡自體の記述に依ると同地は散布地たるの性格を示し、遠賀川の洪水氾濫が充分豫想

せられるのであり、殊に第一類土器を出す筈の立屋敷層では發掘地域に於いては遂に遺物を出土せず、他のものとの對比から單に推定したに過ぎず、第二第三の兩層序の關係に到つても、之を立證すべきより客觀的な記述を缺いてゐる。然るにかゝる薄弱な基礎の上に、第五、第六章で論じられた様な大きな彌生式文化論を展開させたのである以上、初に見た意味での重要な調査報告書たるの感が少く、寧ろ遠賀川の調査を借りて杉原氏一個の意見を自由に書き立てた感が深い。これは出土品が僅少で遺跡自體に書き立てるべき箇處が少なかつたといふ事の故に是認せらるべきではない。又本文中發掘に依つて檢出せられた個々のものに對する正しい記述がなく、從來出土の土器を一括して述べられて居り、而もそれにあつても圖版参照番號すら附されてゐない等は正確なる可き筈の遺跡の調査報告としての何よりも大きい缺陷である。なほこの彌生式文化觀なるものもわざ／＼著者に依らねばならぬが如き新鮮味を缺くものなるに於いて、その序言に於ける著者の抱負と遠いことをも感ぜざるを得ないものがある。(葦芽書房發行、定價拾五圓)(藤岡謙二郎)

### 羊頭窪

——東方考古學叢刊、乙種第三冊——水野清一 等著

一昨年秋のことである。當城子四平山石塚の調査が行はれて、此處から豊富なる黒陶を發見し、河南安陽・山東城子崖などの史前文化の一系列が、はるかに海を越えて關東州にも及んでゐた

ことが確認されたのは、近時の東亜考古學上における重要な発見の一つであつた。従來は秦漢文化の南滿への波及に先んじては、遠く彩陶文化の流傳によつてこの地の石器文化の素地が作られたものであらうとのみ考へられてゐたが、この時以來、少くとも關東州については、黒陶文化の役割がより有力に考へられる様になつたのである。

こゝにおいて想起せられるのは昭和八年五月、東亜考古學會が金關丈夫・三宅宗悅氏等を派して調査を行つた旅順鵜灣内羊頭窪遺跡から、占卜に使用したと目すべき一獸骨の發見されてゐる事實である。占卜獸骨といへば安陽殷墟のそれが特に著名であるが、城子崖などからも出て居り、羊頭窪のものは文字の無い點その他からいつて、むしろ城子崖に近いと見られる。ところが羊頭窪の土器は城子崖や、また四平山の様な黒陶そのものではないといふのである。羊頭窪の土器及びその文化の様相を明示すべき調査報告書の公刊が待たれた所以である。

かゝる情勢下、かつての調査當事者たちが或は戦地に征き、或は任地を轉じて十年を経た今日、つひに水野氏の努力によつて、新なる視點のもとにまとめられた題記の一卷を手にし得たことは、學界の慶事これに過ぐるものはない。

本書によれば羊頭窪遺跡を残した人々は石積の壁礎を有する塚形家屋に定住し、多數の石斧の他に、農耕生活を反映する石庖丁と、漁撈の象徴たる豊富な骨製釣針などを持つてゐた。海濱に居を構へて貝塚を遺し、豚鶏を飼ひ、犬をもつて鳥獸を狩食したら

しい。復原せられたかくの如き様態はなほ特色に乏しいものである。しかし著者は壺、椀、豆等の器形製作の特色を通じて本遺跡の土器に黒陶の傳統の存することを明かにし、前記の卜骨の示す事實に加へて、鳥賊甲型の石劍と扁平有孔石斧を取上げて、黄河中原に發達した戈、鉞の波及と解することにより、遼東・山東兩半島の間に古代文化の密接な紐帶を描くことに成功した。

本書出版の意義と結論の一端とを擧げて紹介の辭に代へるならば、それは以上の點に中心をもつ。しかし、資料としての考古學的報告書の價値は必ずしも結論の大小を以てのみ論すべきものではない。著者が本書の作製に際して、前著『赤峰紅山後』において創設した記載型式の完成に努め、また圖版の編成等に示した創意の實現は劃期的なものである。更に報告書の作製が紙上に現はれない多大の努力を要するものであることを思ふ時、調査者に代つてその任に當られた著者の心事に對し深く敬意を表するものである。

なほ本書には島田貞彦・森修氏の『望海塢』なる報告その他が附載せられてゐる。(東亜考古學會發行、四六倍版一六二頁、圖版六〇、定價貳拾五圓)(小林行雄)。